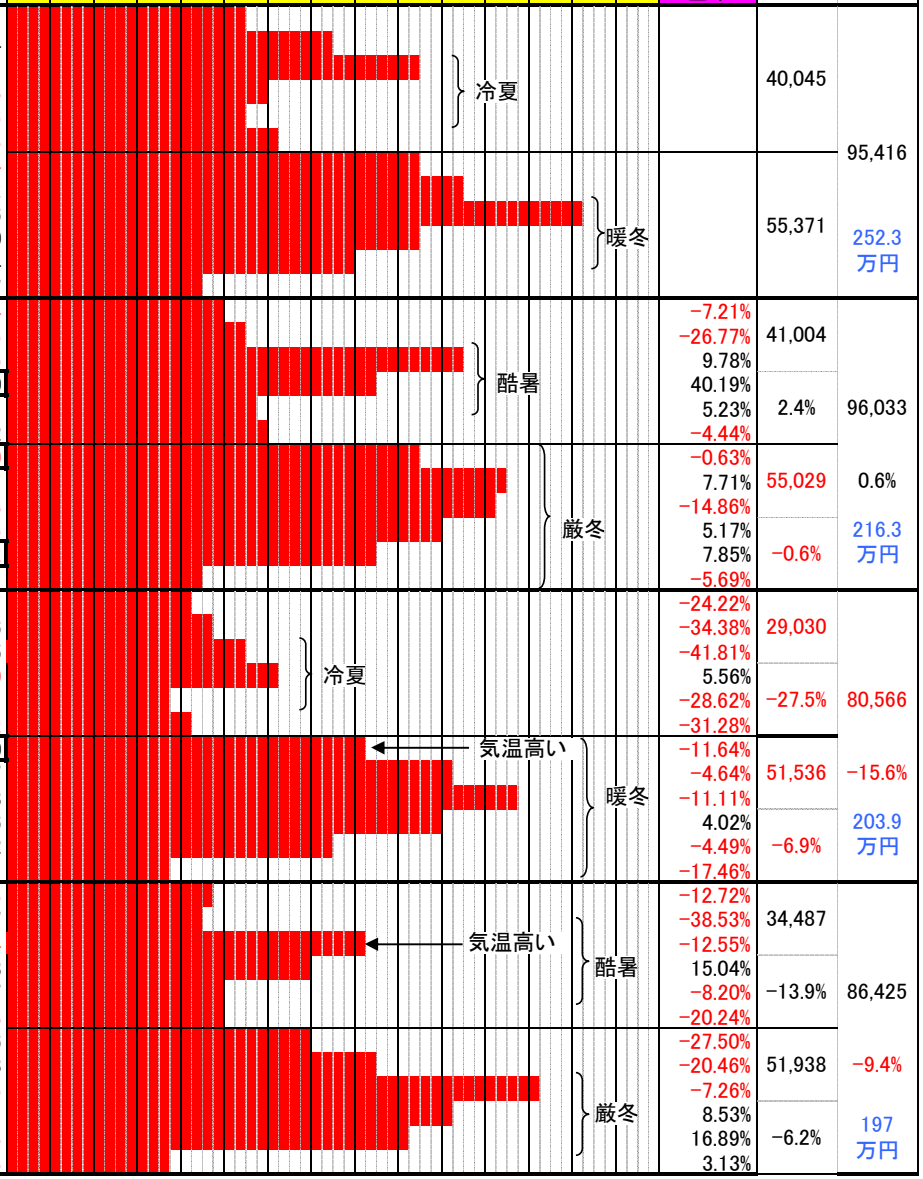
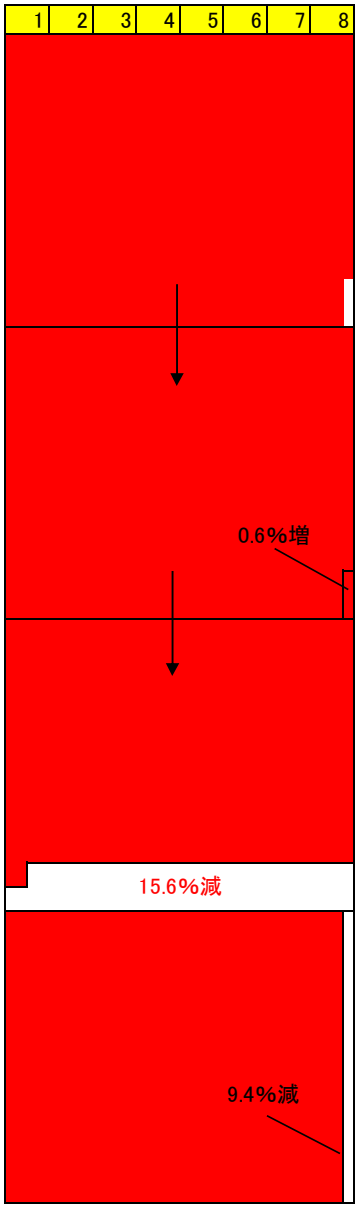
電気使用量　集計

年	月	kw	平均気温	冷暖平均	※基準比	※基準比	半期集計	年間集計
13	5	5,450	18.1		0.1			
13	6	7,440	21.6		0.4			
13	7	9,482	26.8	23.6	1.1		40,045	
13	8	6,002	24.4		-1.8			
13	9	5,412	21.4		-1.6			
13	10	6,259	16.1		-0.3			95,416
13	11	9,487	9.9		-0.4			
13	12	10,606	4.4		-0.2			
14	1	13,162	4.0	6.6	2.6		55,371	
14	2	9,564	5.2		2.0			252.3
14	3	7,946	9.4		2.4			万円
14	4	4,606	14.1		0.7			
14	5	5,057	16.7		-1.4	-7.21%		
14	6	5,448	20.0		-1.6	-26.77%	41,004	
14	7	10,409	26.3	23.5	-0.5	9.78%		
14	8	8,414	26.4		2.0	40.19%		
14	9	5,695	21.3		-0.1	5.23%	2.4%	96,033
14	10	5,981	16.3		0.2	-4.44%		
14	11	9,427	7.9		-2.0	-0.63%		
14	12	11,424	3.7		-0.7	7.71%	55,029	0.6%
15	1	11,206	2.2	4.7	-1.8	-14.86%		
15	2	10,058	3.6		-1.6	5.17%		216.3
15	3	8,570	6.2		-3.2	7.85%	-0.6%	万円
15	4	4,344	13.0		-1.1	-5.69%		
15	5	4,130	17.4		-0.7	-24.22%		
15	6	4,882	21.7		1.6	-34.38%	29,030	
15	7	5,518	21.2	22.4	0.5	-41.81%		
15	8	6,336	24.5		-2.0	5.56%		
15	9	3,863	22.3		0.1	-28.62%	-27.5%	80,566
15	10	4,301	15.4		-0.2	-31.28%		
15	11	8,383	12.2		2.0	-11.64%		
15	12	10,114	5.2		0.7	-4.64%	51,536	-15.6%
16	1	11,700	2.8	6.5	1.8	-11.11%		
16	2	9,948	5.0		1.6	4.02%		203.9
16	3	7,589	7.3		3.2	-4.49%	-6.9%	万円
16	4	3,802	13.9		1.1	-17.46%		
16	5	4,757	17.8		-0.3	-12.72%		
16	6	4,573	22.3		0.7	-38.53%	34,487	
16	7	8,292	26.4	24.3	-0.4	-12.55%		
16	8	6,905	25.2		0.8	15.04%		
16	9	4,968	23.1		1.7	-8.20%	-13.9%	86,425
16	10	4,992	15.3		-0.8	-20.24%		
16	11	6,878	12.5		2.6	-27.50%		
16	12	8,436	6.2		1.8	-20.46%	51,938	-9.4%
17	1	12,206	2.4	6.1	-1.6	-7.26%		
17	2	10,380	3.1		-2.1	8.53%		197
17	3	9,288	6.1		-3.3	16.89%	-6.2%	万円
17	4	4,750	12.8		-1.3	3.13%		

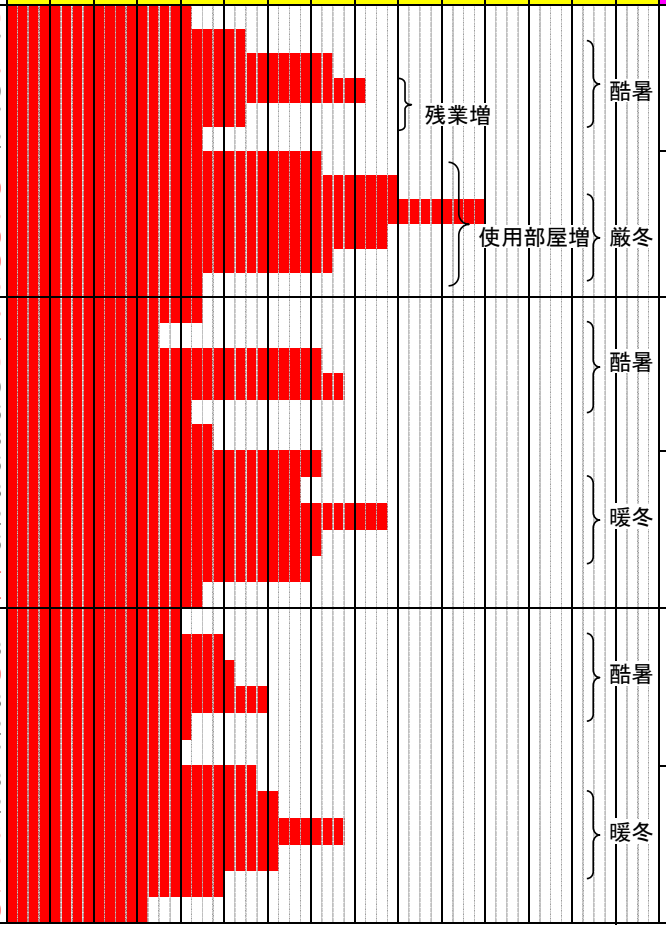




電気使用量　集計

第2期中期3ヶ年計画　H17.5.1～H20.4.30

年	月	kw	平均気温	冷暖平均	※基準比	※基準比	半期集計	年間集計
17	5	4,346	16.2		−1.9	−20.26%		
17	6	5,520	22.3		0.7	−25.81%	35,977	
17	7	7,610	24.0	23.9	−2.8	−19.74%		
17	8	8,306	26.3		1.9	38.39%		
17	9	5,539	23.1		1.7	2.35%	−10.2%	85,906
17	10	4,656	17.3		1.2	−25.61%		
17	11	7,440	9.8		−0.1	−21.58%		
17	12	9,804	2.4		−2.0	−7.56%	49,929	−10.0%
18	1	11,527	1.7	5.1	−2.3	−12.42%		
18	2	8,966	4.2		−1.0	−6.25%		200.0
18	3	7,608	7.4		−2.0	−4.25%	−9.8%	万円
18	4	4,584	11.6		−2.5	−0.48%		
18	5	4,682	17.3		−0.8	−14.09%		
18	6	3,697	21.2		−0.4	−50.31%	33,101	
18	7	7,416	23.9	23.3	−2.9	−21.79%		
18	8	7,932	26.3		1.9	32.16%		
18	9	4,452	21.9		0.5	−17.74%	−17.3%	75,565
18	10	4,922	17.4		1.3	−21.36%		
18	11	7,358	11.4		1.5	−22.44%		
18	12	6,934	6.2		1.8	−34.62%	42,464	−20.8%
19	1	8,880	4.2	7.1	0.2	−32.53%		
19	2	7,462	5.7		0.5	−21.98%		169.6
19	3	7,152	8.0		−1.4	−9.99%	−23.3%	万円
19	4	4,678	11.7		−2.4	1.56%		
19	5	4,121	18.0		−0.1	−24.39%		
19	6	5,011	21.9		0.3	−32.65%	29,273	
19	7	5,393	22.8	23.9	−4.0	−43.12%		
19	8	6,158	27.2		2.8	2.60%		
19	9	4,397	23.6		2.2	−18.75%	−26.9%	64,065
19	10	4,193	16.8		0.7	−33.01%		
19	11	5,810	10.2		0.3	−38.76%		
19	12	6,235	5.6		1.2	−41.21%	34,792	−32.9%
20	1	7,802	2.7	5.9	−1.3	−40.72%		
20	2	6,343	2.6		−2.6	−33.68%		140.3
20	3	5,182	8.2		−1.2	−34.78%	−37.2%	万円
20	4	3,420	13.1		−1.0	−25.75%		



※基準比
（平均気温の基準比とは？）
（使用量の基準比とは？）
=第1期中期3ヶ年計画の月別
平均値と当月の平均値の差

今年の地球、観測史上2番目の暑さ…WMO声明

【ジュネーブ＝渡辺覚】国連の世界気象機関（WMO）は15日、2005年は、観測史上2番目に暑い年だったとする報告書「2005年の地球気候の現状に関する声明」を発表した。

報告書によると、これまでのところ2005年は、陸地や海を含めた地球表面の平均気温が、観測記録の残る1861年以来2番目に高く、比較の基準としている1961～90年の平均（14度）を0・48度上回った。特に北半球は、同平均を0・65度上回る史上最高を記録した。

ただ、南米ペルー沖の太平洋で海水温が上昇するエルニーニョ現象が過去最大規模だった98年の水準には及ばない見通しだという。

（読売新聞）－ 12月16日3時10分更新

電気使用量　集計

第3期中期3ヶ年計画　H20.5.1～H23.4.30

年	月	kw	平均気温	冷暖平均	※基準比	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	※基準比	半期集計	年間集計
20	5	3,478	17.3		−0.8																−36.18%		
20	6	3,905	20.5		−1.1																−47.51%	23,187	
20	7	5,563	25.4	23.4	−1.4													酷暑			−41.33%		
20	8	3,536	25.1		0.7																−41.09%		
20	9	2,831	22.5		1.1																−47.69%	−42.1%	55,381
20	10	3,874	17.1		1.0																−38.11%		
20	11	5,124	10.1		0.2																−45.99%		
20	12	5,390	6.4		2.0																−49.18%	32,194	−42.0%
21	1	7,087	3.6	6.5	−0.4													暖冬			−46.16%		
21	2	6,305	5.0		−0.2																−34.08%		141.2
21	3	5,074	7.5		−1.9																−36.14%	−41.9%	万円
21	4	3,214	13.6		−0.5																−30.22%		
21	5	3,406	18.9		0.8																−37.50%		
21	6	4,020	21.3		−0.3																−45.97%	25,028	
21	7	4,781	24.9	23.2	−1.9													平年並み			−49.58%		
21	8	4,699	24.9		0.5																−21.71%		
21	9	3,936	21.5		0.1																−27.27%	−37.5%	59,008
21	10	4,186	16.6		0.5																−33.12%		
21	11	5,491	10.8		0.9																−42.12%		
21	12	5,866	6.0		1.6																−44.69%	33,980	−38.2%
22	1	7,457	3.3	6.2	−0.7													暖冬			−43.34%		
22	2	6,353	4.0		−1.2																−33.57%		114.1
22	3	5,316	6.9		−2.5																−33.10%	−38.6%	万円
22	4	3,497	10.6		−3.5																−24.08%		
22	5	3,202	17.4		−0.7																−41.25%		
22	6	4,315	22.3		0.7																−42.00%	25,418	
22	7	5,208	26.5	25.1	−0.3													酷暑			−45.07%		
22	8	5,753	28.1		3.7																−4.15%		
22	9	3,458	23.4		2.0																−36.10%	−36.5%	53,983
22	10	3,482	17.4		1.3																−44.37%		
22	11	4,356	10.8		0.9																−54.08%		
22	12	4,961	6.7		2.3																−53.22%	28,565	−43.4%
23	1	6,792	1.5	5.8	−2.5																−48.40%		
23	2	5,441	4.5		−0.7													暖冬			−43.11%		114.7
23	3	4,380	5.5		−3.9								東日本大震災に伴い								−44.88%	−48.4%	万円
23	4	2,635	12.1		−2.0								計画停電								−42.79%		

昨年の温室効果ガス濃度世界最高に…WMO

世界気象機関(WMO)は23日、大気中の温室効果ガス濃度が昨年、産業革命以降で最高になったと発表した。

地球温暖化への影響が一番高いと考えられている二酸化炭素濃度(CO2)は2007年に比べ2.0ppm上昇し385.2ppmに、メタンは同じく7ppb増え1,797ppbに、一酸化窒素(N2O)は0.9ppb増の321.8ppbとなった。ハロカーボンもフロンガス規制でクロロフルオロカーボンなどは少しずつ減っているものの代替フロンが急激に増え、これらの温室効果が心配されている。
大気中のCO2濃度は、化石燃料の大量消費など人為的な影響がほとんどなかった産業革命以前の1750年までは280ppmとほぼ一定に保たれていたが、その後、上昇を続けている。温室効果への影響力をみる放射抗力(radiative forcing)で比較すると、もっとも影響の大きいのはCO2で、1750年に比べ温室効果ガスによる地球温暖化影響増加分の63.5%を占めている。次いでメタンが18.2%、N2Oが6.2%で、残り12%がハロカーボンとなっている。
(サイエンスポータル) － 2009年11月24日

今年の世界平均気温、平年より0.36℃高…気象庁

気象庁は今年の世界、日本の気温の速報値を発表、世界の気温は平年値に比べ036℃高く、1891年以降では2番目に高かったことを明らかにした。日本は平年値に比べ0.85℃高く、これは1891年以降では4番目に高い値だった。
平年値というのは、1891-2000年の30年間平均値をいう。1990年以降、高温の年がしばしばあり、この理由について気象庁は温室効果ガスの増加に伴う地球温暖化と数年から数十年程度の規模で繰り返される自然変動によると見ており、今年の平均気温が高いのはこれに昨年夏から今年春まで持続したエルニーニョ現象が影響しているためとしている。
100年間でみると、世界の気温は0.68℃、日本の気温は1.15℃の割合でそれぞれ上昇している。
(サイエンスポータル) － 2010年12月22日

電気使用量　集計

第4期中期3ヶ年計画　H23.5.1～H26.4.30

年	月	kw	平均気温	冷暖平均	※基準比	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	※基準比	半期集計	年間集計
23	5	2,875	17.2		-0.9																-47.25%		
23	6	3,050	21.8		0.2																-59.01%	19,307	
23	7	3,602	26.0	24.3	-0.8													酷暑			-62.01%		
23	8	3,826	25.9		1.5																-36.25%		
23	9	3,007	23.5		2.1																-44.44%	-51.8%	46,626
23	10	2,947	17.0		0.9																-52.92%		
23	11	4,368	11.5		1.6																-53.96%		
23	12	4,762	3.9		-0.5																-55.10%	27,319	-51.1%
24	1	5,810	1.5	5.2	-2.5													厳冬			-55.86%		
24	2	5,522	2.6		-2.6																-42.26%		106.9
24	3	4,378	6.4		-3.0																-44.90%	-50.7%	万円
24	4	2,479	12.2		-1.9																-46.18%		
24	5	2,345	17.8		-0.3																-56.97%		
24	6	2,417	20.1		-1.5																-67.51%	18,655	
24	7	3,756	25.2	24.3	-1.6													酷暑			-60.39%		
24	8	4,368	27.6		3.2																-27.22%		
24	9	3,175	24.4		3.0																-41.33%	-53.4%	43,958
24	10	2,594	17.0		0.9																-58.56%		
24	11	3,691	9.3		-0.6																-61.09%		
24	12	4,474	4.0		-0.4																-57.82%	25,303	-53.9%
25	1	6,499	2.1	5.6	-1.9													厳冬			-50.62%		
25	2	5,407	2.8		-2.4																-43.47%		123.0
25	3	3,050	9.6		0.2																-61.62%	-54.3%	万円
25	4	2,182	12.1		-2.0																-52.63%		
25	5	2,261	17.8		-0.3																-58.51%		
25	6	2,882	21.6		0.0																-61.26%	17,935	
25	7	3,478	25.1	24.1	-1.7													酷暑			-63.32%		
25	8	3,605	26.9		2.5																-39.94%		
25	9	3,014	22.9		1.5																-44.31%	-55.2%	42,931
25	10	2,695	17.8		1.7																-56.94%		
25	11	3,830	9.7		-0.2																-59.63%		
25	12	4,390	4.8		0.4																-58.61%	24,996	-55.0%
26	1	5,926	2.3	5.4	-1.7																-54.98%		
26	2	5,138	2.8		-2.4													厳冬			-46.28%		129.1
26	3	3,648	7.6		-1.8																-54.09%	-54.9%	万円
26	4	2,064	12.8		-1.3																-55.19%		

2011年(平成23年)の世界と日本の年平均気温について

気象庁は1日、世界と日本の年間平均気温について発表。
2011年、世界の年平均気温(陸域における地表付近の気温と海面水温の平均)の偏差は+0.07℃で、1981年以降12番目に高い値となりました。
2011年の日本の年平均気温偏差＊1は+0.15℃で、1898年以降では17番目に高い値となりました。
近年、世界と日本で高温となる年が頻出している要因としては、二酸化炭素などの温室効果ガスの増加に伴う地球温暖化の影響に、数年～数十年程度の時間規模で繰り返される自然変動が重なったものと考えられます。2011年の世界の年平均気温が2010年に比べて低くなった要因の一つとしては、2011年春まで持続し、また2011年秋から発生しているラニーニャ現象の影響が考えられます。
（気象庁）－ 2012年2月1日

今年(平成24年)の南極オゾンホール

今年の南極上空のオゾンホールは、9月下旬に最盛期を迎えて南極大陸の約1.5倍まで拡大しましたが、1990年代以降で最も小さい規模となりました。
オゾンホールの面積は、1990年代以降で最小となりましたが、長期的にみると1980年代前半と比較して依然として規模の大きい状態が継続しています。これは、南極上空のオゾン層破壊物質の濃度は緩やかに減少しているものの、依然として高い状態にあるためです。
（気象庁）－ 2012年10月24日

平成26年2月の気象

・太平洋側では2度、大雪に見舞われ、関東甲信地方を中心に記録的な大雪となった。
低気圧が日本の南岸を通過し、7日から8日にかけてと14日から16日にかけては広い範囲で大雪となり、関東甲信地方を中心に最深積雪の記録を更新したところがあった。
・北日本から西日本にかけて月平均気温は平年並だが、気温の低い日が多かった。
・日本海側では、降雪量は少なかった。
（気象庁）－ 2014年3月3日

電気使用量　集計

第5期中期3ヶ年計画　H26.5.1～H29.4.30

年	月	kw	平均気温	冷暖平均	※基準比	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	※基準比	半期集計	年間集計
26	5	2,083	18.7		0.6																−61.78%		
26	6	2,323	21.9		0.3																−68.78%	15,943	
26	7	3,653	25.1	23.5	−1.7														酷暑		−61.47%		
26	8	3,070	26.0		1.6																−48.85%		
26	9	2,299	21.1		−0.3																−57.52%	−60.2%	37,075
26	10	2,515	16.6		0.5																−59.82%		
26	11	3,730	11.5		1.6																−60.68%		
26	12	3,982	3.9		−0.5																−62.46%	21,132	−61.1%
27	1	4,262	3.2	6.2	−0.8														暖冬		−67.62%		
27	2	3,725	3.7		−1.5																−61.05%		
27	3	3,127	8.5		−0.9																−60.65%	−61.8%	
27	4	2,306	13.6		−0.5																−49.93%		
27	5	2,383	20.2		2.1																−56.28%		
27	6	2,434	21.4		−0.2																−67.28%	17,001	
27	7	3,852	25.6	24.2	−1.2														酷暑		−59.38%		
27	8	3,017	25.4		1.0																−49.73%		
27	9	2,706	24.4		3.0																−50.00%	−57.5%	37,797
27	10	2,609	17.0		0.9																−58.32%		
27	11	3,304	9.3		−0.6																−65.17%		
27	12	3,426	4.0		−0.4																−67.70%	20,796	−60.4%
28	1	4,635	3.4	6.0	−0.6														暖冬		−64.78%		
28	2	3,982	4.7		−0.5																−58.36%		
28	3	3,310	8.4		−1.0																−58.34%	−62.4%	
28	4	2,139	13.8		−0.3																−53.56%		
28	5	2,320	19.2		1.1																−57.43%		
28	6	2,658	21.7		0.1																−64.27%	22,464	
28	7	4,150	24.2	23.9	−2.6														酷暑		−56.23%		
28	8	5,533	26.2		1.8																−7.81%		
28	9	4,018	23.3		1.9																−25.76%	−43.9%	45,888
28	10	3,785	17.1		1.0																−39.53%		
28	11	4,889	9.5		−0.4																−48.47%		
28	12	4,448	6.0		1.6																−58.06%	23,424	−51.9%
29	1	5,217	3.1	5.9	−0.9																−60.36%		
29	2	3,557	4.3		−0.9														暖冬		−62.81%		
29	3	3,173	6.6		−2.8																−60.07%	−57.7%	
29	4	2,140	13.2		−0.9																−53.54%		

世界の二酸化炭素濃度の増加と海洋酸性化が進行中

WMOの温室効果ガス世界資料センターとして、気象庁が大気中の温室効果ガス観測データについて世界の専門家と協力して解析した結果、2013年の世界の二酸化炭素濃度(CO2、年平均)と前年からの年増加量は観測史上最も大きかったことが判明しました。大気CO2増加に伴い、世界の海洋酸性化も進行しています。

今回の解析結果によると、大気中の主要な温室効果ガスである二酸化炭素(CO2)、メタン(CH4)及び一酸化窒素(N2O)は増加を続けており、2013年における世界平均濃度(年平均)は過去最高値を記録しています。さらに、CO2の2012年からの年増加量は1984年以降で最も大きい2.9ppmとなりました。

また、長期間の海洋時系列観測データの解析から、人為起源によって増え続けた大気中の二酸化炭素を海洋が吸収してきたため、海洋酸性化が世界的に進行しており、海洋の生態系への影響が懸念されています。

(気象庁) ― 2014年9月9日 ―

平成27年(2015年)8月中旬以降の不順な天候

平成27年(2015年)8月中旬から9月上旬にかけて、西日本から東北の広い範囲で平年より降水量が多く、日照時間が少ない状態となりました。

このような不順な天候は、本州付近に前線が停滞し、低気圧の影響を受けやすかったこと、台風第15号、第17号、第18号が日本に影響(う第15号、第18号は上陸)したことによってもたらされました。

本州付近に前線が停滞した要因としては、上空の偏西風がアジアの広い範囲で平年より南に偏り、加えて日本の西で南に蛇行したことが関していたとみられます。

偏西風が南に偏り、また蛇行した要因としては、エルニーニョ現象の影響でアジア域のモンスーンに伴う対流活動が不活発だったことが関連していたとみられます。　　(気象庁) ― 2015年9月18日 ―

日本海の水温と酸素量の変化について

日本海における2010年以降の海洋気象観測船の観測結果を解析し、本海深層(2500m～3500m)での水温の上昇及び酸素量の減少が進んでいることを確認しました。

2010年以降、深層において昇温と貧酸素化が進行していることは、海循環が弱まり、低温で酸素を多く含んだ海水が深層に供給されていないことを示唆しています。その原因として、近年冬季において、著しく気温低い年の頻度が減ったため、低温で酸素を多く含んだ海水が形成されにくくなっていることが考えられます。将来にわたり、このような深層での温と貧酸素化の傾向が続くと、日本海の生態系への影響が懸念され

(気象庁) ― 2016年12月8日 ―

電気使用量　集計

第6期中期3ヶ年計画　H29.5.1～R2.4.30

年	月	kw	平均気温	冷暖平均	※基準差	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	※基準比	半期集計	年間集計
29	5	2,715	19.1		1.9																−50.18%		
29	6	2,805	20.9		0.3																−62.30%	16,792	
29	7	3,372	26.4	23.6	2.2													暑夏			−64.44%		
29	8	2,837	25.1		−0.5																−52.73%		
29	9	2,548	21.9		0.0																−52.92%	−58.1%	37,193
29	10	2,515	15.7		−0.4																−59.82%		
29	11	3,745	9.6		−0.5																−60.52%		
29	12	3,546	3.8		−1.1																−66.57%	20,401	−61.0%
30	1	4,832	2.0	5.6	−0.5													寒冬			−63.29%		
30	2	3,560	3.1		−0.2																−62.78%		
30	3	2,713	9.7		2.9																−65.86%	−63.2%	
30	4	2,005	15.3		2.8																−56.47%		
30	5	2,556	18.8		1.6																−53.10%		
30	6	2,731	21.9		1.3																−63.29%	16,875	
30	7	3,671	27.6	24.6	3.4													暑夏			−61.28%		
30	8	3,165	26.9		1.3																−47.27%		
30	9	2,415	21.9		0.0																−55.38%	−57.9%	35,774
30	10	2,337	17.7		1.6																−62.66%		
30	11	2,572	12.4		2.3																−72.89%		
30	12	3,499	5.5		0.6																−67.01%	18,899	−62.5%
31	1	4,287	3.0	6.9	0.5													暖冬			−67.43%		
31	2	3,663	4.9		1.6																−61.70%		
31	3	2,666	8.6		1.8																−66.45%	−65.9%	
31	4	2,212	12.1		−0.4																−51.98%		
31	5	2,403	19.3		2.1																−55.91%		
31	6	2,413	20.9		0.3																−67.57%	16,436	
31	7	3,376	23.7	24.0	−0.5													暑夏			−64.40%		
31	8	3,266	27.4		1.8																−45.58%		
31	9	2,731	23.9		2.0																−49.54%	−59.0%	34,905
31	10	2,247	18.3		2.2																−64.10%		
31	11	3,028	11.0		0.9																−68.08%		
31	12	3,512	6.0		1.1																−66.89%	18,469	−63.4%
32	1	3,952	5.0	7.4	2.5																−69.97%		
32	2	3,270	5.8		2.5													暖冬			−65.81%		
32	3	2,725	9.1		2.3																−65.71%	−66.6%	
32	4	1,982	11.4		−1.1																−56.97%		

世界の年平均気温が歴代3位となる見込み

気象庁では、地球温暖化の実態を把握するため、世界及び日本の気温の経年変化を監視しています。

2017年の世界の年平均気温偏差(速報値)は+0.39℃で、統計を開始した1891年以降で3番目に高い値となる見込みです。また、2017年は世界の平均気温を上昇させる傾向があるエルニーニョ現象が発生していない年の中では最も高い年となる見込みです。世界の年平均気温は、長期的には100年あたり0.73℃の割合で上昇しています。

2017年の日本の年平均気温偏差(1891～2010年の30年平均値からの偏差)は+0.38℃で、統計を開始した1898年以降で10番目に高い値となる見込みです(第1位は2016年の+0.88℃)。日本の年平均気温は長期的には100年あたり1.20℃の割合で上昇しており、特に1990年代以降、高温となる年が多くなっています。(気象庁)-2017年12月21日-

今年の南極オゾンホール～南極オゾンホールは回復傾向～

気象庁が米国航空宇宙局(NASA)の気象観測データを基に解析した結果、2018年の南極オゾンホールは、例年と同様に8月頃に観測され始め、9月20日に今年の最大面積である2,460万km2(南極大陸の約1.8倍)まで拡大しました。今年は、南極上空(高度20km付近)の気温が低く、南極オゾンホールの面積は、8月下旬以降、最近10年間の平均値より概ね大きく推移しています。

オゾン層破壊物質の濃度は緩やかに減少しているものの、依然として高い状態にあり、気象状況によって南極オゾンホールの面積は大きくなることがあります。今年は、南極オゾンホールの面積が大きくなる気象状況下にありましたが、2000年以降の最大面積は統計的に有意な縮小傾向を示しています。このことから、南極オゾンホールは回復傾向にあると考えられてます。(気象庁)－2018年11月6日

令和元年台風第19号に伴う大雨の要因について

令和元年台風19号の接近、上陸に伴い、台風経路の左側にあたる東日本から東北地方を中心に広い範囲で記録的な大雨となりました。この特徴的な降水分布となった理由は、数値シミュレーションを実施し、現実的な地形がある場合と地形を除去した場合の降水量分布を計算して、前線などによる降水と地形の影響による降水について分析しました。この結果から、台風経路の左側にあたる東日本から東北地方を中心に記録的な大雨となった特徴的な降水量分布は、温帯低気圧に構造が変化する過程でみられる、大陸の高気圧の本州付近への張り出しに伴う比較的低温の空気と北上する台風周辺の暖かく湿った空気との間で前線が形成、強化されたことが原因とわかりました。

(気象庁)－2019年12月23日